【解説】

プラトンの思想には、イデア論やエロースなど抽象的な概念がたくさん登場するので、多くの生徒にとって理解しづらい人物である。そこで私は、①プラトンの思想は、非業の死を遂げた師匠ソクラテスの思想を正当化するための巨大な舞台装置であり、その中にソクラテスの思想を意味づけることによって、師匠であるソクラテスを正当化（誤解の解消）をしようとしたのではないか、という大胆な仮説を示しつつ、また、②プラトンの思想をできるだけ私たちの生活に引き寄せて説明することを試みている。

①「現象界とイデア界」という二元的世界観は、「この世とあの世」に例えることが可能かも知れないが、私はそういう“荒唐無稽な”説明に深く入り込みすぎず、プラトン自身が説いている「洞窟の比喩」に焦点を当てる。洞窟の奥深くに囚われている人間が自分たちの置かれている状況を客観的に認識し、洞窟の外（イデア界＝真理の世界）へと歩み始めることは、ソクラテスのいう「無知の知」や「真の知を愛し求めること」に相当するのである。アナムネーシスやエロースさえも、ソクラテスの思想と並行関係にあることに気づき、プラトンの思想がソクラテスの思想を理解するための「壮大なたとえ話」なのだと考えれば、それほど難しく考えなくてもよいはずである。

②「あらゆる事物に本質としてのイデアがある」という思想は、サンテグジュペリの『星の王子様』の有名なセリフ「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。肝心なことは目に見えないんだよ」と結びつけて説明すると分かりやすい。つまり私たちが五感をつかって経験できる現象だけを見ていても、本質（大切なこと）はつかめない。現象の本質（イデア）は、頭を使い理性を駆使してこそ理解できるものである。そのことをプラトンは表現しようとしているのではないか。

たとえば政治や経済の動き、さまざまの社会問題、人間の行動を考えてみるがよい。凶悪な殺人事件が発生し、その容疑者は極悪人のように見えても、事件の背後を探っていくと、想像を絶する事情があった（あるは冤罪だった）、というようなケースがある。ものごとを「見える」部分だけで判断すると誤った認識に陥る危険がある。